

# 琉球大学学術リポジトリ

生徒の主体的な学びの伸長を探る単元構造一問いを中心においた教科等横断型中学校英語科授業モデルの模索一

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学院教育学研究科 公開日: 2023-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安里, 三矢子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002019853">https://doi.org/10.24564/0002019853</a>

## 生徒の主体的な学びの伸長を探る単元構造

### — 問いを中心においた教科等横断型中学校英語科授業モデルの模索 —

安里 三矢子

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・浦添市立浦西中学校

#### 1. はじめに

中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説外国語編では、学年が上がるにつれて生徒の外国語科の学習意欲に課題が生じることや、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて自分の考えや気持ちなどを習得した知識や経験を生かして適切に表現することなどに課題がある、と述べられている(文部科学省 2018)。これらの課題は、第 2 言語の習得度合にその習得に対する意欲の差が影響すること(Bley-Vroman, R : 1989)、第 2 言語習得の習熟度が増して、創造的な言語使用の時期に入ると言語使用の正確さが著しく減少すること(和泉 : 2016)、「一生懸命やったのに間違えること」が不安を生んだり、自尊心を脅かしたりすることに繋がると第 2 言語習得に負の影響があること(山崎 : 2005)などが関係していると考えられる。生徒がテストや質問紙調査で無解答・無回答を選択するのは、自尊心を脅かされたくないということの現れの 1 つではないだろうか。そうであるならば、生徒の主体的に着目して中学校外国語科の授業実践を再構築することは意義のあることであると言える。生徒の主体的を育むためには、生徒にとって「主体的に取り組みたい」と感じさせるきっかけとなる問いの設定を通して、学びへの主体性を向上させ、問題解決力、各教科のより深い理解や関心を育む単元構造を有する授業の構築が必要とされるであろう。

#### 2. 研究の目的

本研究は中学校外国語科において、生徒が主体的に解決したくなるような問いを設定し、それを起点として、「課題解決に主体的に取り組む」単元構造を探ることを目的とする。

#### 3. 研究の方法及び内容

生徒が関心を寄せるような単元を貫く問い、およびその問いの解決の布石となるような授業毎の問いを立て、問いに迫る際に自然と起こる対話を通して、「気づき」を生む授業づくりを実践する。生徒を対象とした実践前後の単元テスト、理解度テストから生徒の変容や思考の言語化の様子を分析し、単元構造・授業の仕組みを評価する。

U 字型発達曲線(図 1)に示されるように、第 2 言語習得の創造的言語使用時期である第 2 段階に入ると、言語使用の正確さが著しく下がってくる(和泉:2016)。この時期に間違えることへの不安を抑制し、思考していることを表出したいという意欲を掻き立てることが U 字発達曲線における第 2 段階を経るための支えになり、第 3 段階へと移行していくと想定される。胸組(2022)は、学びの次元を高めるには、「気づき」が、無知から学習へ、学習から学修へ、学修から学嵩へと上昇する機会となる事が必要であると唱えて

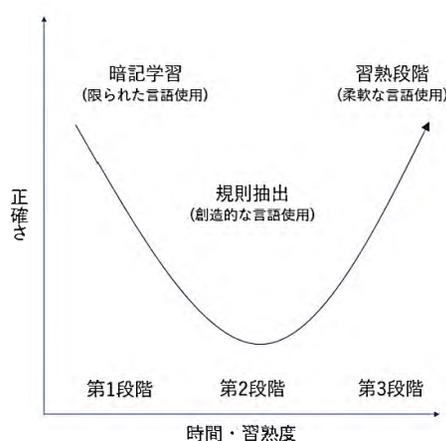


図 1 第 2 言語習得に見られる U 字型発達曲線 (和泉:2016)

いる。そのため、「気づき」を生む単元構造の要として、生徒が課題解決に向かいたくなるような「問い」の設定が必要だと想定される。したがって、本実践では、どの教科の知識も関連させやすい問いの設定として、SDGs を取り上げた。SDGs の 9 番目の目標である「産業と技術革新の基盤をつくろう」を本実践の単元として置き、「なぜ産業と技術革新の基盤づくりが必要なのか」という問いを設定した。また、その問いの解決に向かって、自身の考えや経験等と他者の考えや経験等とを擦り合わせるための対話も、「気づき」を生む機会となると想定した。一方で、中学生にとって、英語という言語における既得の知識・技能に制限があるため、英語を通してこれらの情報を統合するには難易度が高い。そのため、単元の適切な時間に他教科・領域を組み込むことで、母語を使って既得の知識や、経験、感情などを整理・統合する過程を設けた。その後、英語でそれらを捉えなおすことで、多角的な統合が可能となり、価値の創造や課題解決へのアプローチの幅も広がると想定して実践を行った。

#### 4. 授業実践の実際

沖縄県 A 市立 A 中学校 3 年 2 組 32 名、3 年 4 組 32 名を対象として、筆者が授業実践を行った。授業は、2022 年 9 月 1 日から 9 月 15 日までの 14 日間実施した。3 年 2 組は後述の単元構成のうち、第 3 時以降の英語科のみを実施し、3 年 4 組は後述の単元構成通りに実施した。

##### (1) 学級の様子

教科担任および学級担任からの聞き取りによれば、両学級の特徴は以下の通りである。2 組は学年内では最も活発なクラスの 1 つである。学級内の学力において上下間の乖離は大きい、下位層の生徒も比較的声を挙げて授業等に参加する様子が日常的に見られる。しかし、集中力が持続しない生徒が多く、難しい課題や興味の湧かない内容に取り組む場面になると、居眠りをしたり、授業と関係のない私語をはじめめる生徒が多い。4 組は、学年内では最も静かなクラスの 1 つである。学級内の学力において上下間の乖離は平均的であり、上位層も下位層も授業中に発言したり、手を挙げるなどの意思表示をしたりすることが日常的にほとんど見られない。しかし、2 組では集中力が切れるような課題や学習内容に対しても、居眠りをしたり私語をしたりすることはなく、黙々と取り組む生徒が多い。

##### (2) 単元構造と授業の主な流れ

本単元の構造を図 2 に示す。第 3 時 (道徳) に資料「言葉の向こうに」を活用し、「相手の立場を尊重し、色々なものの見方や考え方があること」について考え、第 4 時 (学活) に、「情報モラルを考える (2) エ」を通して、自分のインターネットの活用ルールについて考えた。その後、第 5 時から第 12 時までを外国語科「Unit 4 AI Technology and Language」で構成した。

「Unit 4 AI Technology and Language」は、投稿された記事から必要な情報を読み取ったり、自身の意見やその背景について情報を整理して伝えたりできるようになることを目標とした単元である。第 9 時以降は自身がお薦めする AI 機器を紹介するプレゼンテーションを英語で作成し、班や学級全体で意見を伝え合う活動を行った。

それぞれの生徒が解決した

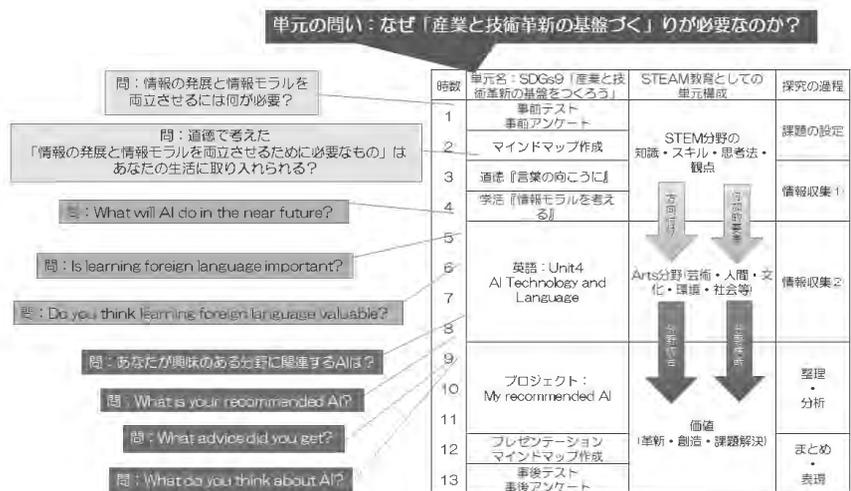


図 2 問いを中心においた単元構造

い「問い」を持って授業に臨んでもらうために、反転学習を参考に、ワークブック等を活用した事前課題を提示した。展開では、教科書本文の読み取りに関することや AI テクノロジーに関する問いを設定し、個人・ペア・グループなどで対話したり協働したりしながら問いの解決に迫った。まとめに本時の問いに対する答えを OPP シートへ英語で書き、振り返りを日本語で書いた。

## 7. 結果と考察

### (1) 分析の方法

筆者が行った授業実践が生徒の英語科及び単元のテーマである SDGs9 における解答・回答意欲に与えた影響を検証するために、授業実践の前後に「Unit 4 AI technology and Language」の単元テスト(表 1)及び、「SDGs 9:産業と技術革新の基盤をつくろう」に関する理解度テストを行った。検証の対象は授業実践前後両方の単元テスト及び理解度テストに回答した生徒各クラス 25 名ずつとした。授業実践の前後で生徒の無答数に統計的な有意差があるかどうかを確かめるため、js-STAR XR (1.1.8j)を用いて対応のある t 検定を行った。

表 1 単元テスト及び理解度テストの内容

	大問	小問	設問
単元テスト	1	①～④	英語以外の外国語を学ぶことについて、ウェブサイトに見聞が寄せられました。①Miguel from Mexico, ②Yuna from Korea, ③Toshio from Japan, ④Adinda from Indonesia 4つの意見は、それぞれ、どういう意見を伝えていると思いますか。要点を英文2文程度で書きましょう。(英文が難しい場合は、日本語でも構いません。)
	2	①～②	ケンタ(Kenta)は自分の意見を投稿するための下書きを考えています。下線部は上(大問1)のどれの意見に近いでしょうか。( )に名前を書きましょう。①If I learn another language, I think I can make friends from many countries, and learn about other cultures. (中略) ②learning more languages will lead to more diversity.
	3		左ページ(大問1)の投稿文を参考に、あなたは、外国語を学ぶ事についてどう思いますか。(日本語も可)
	4		AIについて知っていることや、思っていることを書いてみましょう。(英文が難しい場合は日本語でも構いません。)
理解度テスト	1		産業とは?
	2		技術革新の基盤とは?
	3		なぜ技術革新の基盤づくりが必要なのか?

### (2) 結果と考察

単元テスト及び理解度テストの結果は以下の通りである(表 2)。

表 2 単元テスト及び理解度テストの結果(無答数) \*有意水準 5%以下

組	事前事後テスト						理解度テスト					
	平均無答数		平均無答率		無答率の差	検定結果	平均無答数		平均無答率		無答率の差	検定結果
	事前	事後	事前	事後			事前	事後	事前	事後		
2組 n=25	1.32	1.00	31%	16%	-15	*p=0.0026	3.68	2.12	57%	40%	-17	*p=0.008
4組 n=25	1.92	1.52	24%	22%	-2	p=0.5650	1.68	0.92	34%	23%	-11	*p=0.0151

2組では、単元テストおよび理解度テストの両方において平均無答数の事前・事後の値の差が有意に大きかった(p<0.5)。単元テストにおいて、無答数が減少した理由としては、生徒が声を挙げて授業等に参加する様子が日常的に見られるという2組の雰囲気の影響して、ペアやグループで授業毎の問いや単元の問いへ自力解決する際に対話が生まれやすく、他者の考えに触れることで、自身の考えを吟味するタイミングが増えたことにより、事前テストでは無答にしていた解答に挑戦し、解答する生徒が増えた事が想定できる。また、理解度テストの無答数が減少した理由としては、英語で AI Technology の進歩と多言語学習の必要性のについて考えることを通して、理解度テストで問われた設問に対する自身の考えを表出できるようになったと考えられる。4組では、事前事後テストにおいて、平均無答数に有意差はみられなかった(p>.05)ものの、理解度テストでは実践前の無答数が実践後の無答数よりも有意に大きかった(p<0.5)。4組では、生徒が授業中に発言したり、手を挙げるなどの意思表示をしたりする

ことが日常的にほとんど見られないため、未知のことに取り組むという不安要素が高い単元前半の授業では、ペアやグループになったとしても課題解決に取組めず、白紙のままの状態の場面も見られた。そこで、OPPシートに記載された疑問や生徒のつぶやきなどから「生徒が分からないと感じていること」を拾い、次時の冒頭部分で共に考える時間を設定したり、新出語彙に触れることが出来るBINGOやCROSS WORDを取り入れたりした。それにより、単元後半になるにつれて、授業毎の問いに他者や教材と対話しながら自身の意見をまとめていく様子が見られるようになった。事前事後テストの解答率の有意な差として現れはしなかったが、道徳・学活を単元の冒頭に取り入れたこともあり、単元の問いに迫る理解度テストでは、回答率が上がったと考えられる。無答数の減少が解答意欲の向上を示していると思えば、英語事前事後テストの内容においては、大問2を除く全ての設問が記述式であることから、無答率が高まりやすい傾向はあると考えられるものの、2組では解答意欲が向上し、4組では向上しなかったと言える。このことから、生徒が安心して、興味を持って取り組める難易度の問いを設定することや、問いに迫る活動時に安心して他者と対話したり、自身の考えが表出できるようにしたりする授業構造であることが、生徒の解答・回答意欲に影響するのではないかと考えられる。

## 8. 今後の研究に向けて

本実践では、反転学習を意図した事前課題に取り組むことを通して「自身の分からないことを問いとして授業で解決する」ことを前提として授業構想を立てたが、予習を実施する生徒がほとんどいなかった。故に、毎授業の導入部分で、生徒の分からないことを探り、それを補うというプロセスを追加せざるを得ず、生徒たちが問いに迫る活動時間を十分に確保できなかった。そのため、生徒が「できた」「分かった」という達成感を感じさせることが不十分であった。今後は、「生徒の関心が高まる問い」を起点にした単元構造と授業構造を構築し、他教科領域を横断する視点に立ちながら授業内容を精選すること、取り組みたくなる予習の仕組みを構築することで、生徒自身が課題や問いに迫ることのできる時間を確保したい。

## 引用文献

- Bley-Vroman, Robert., 1990, "The logical Problem of Foreign Language Learning," *Linguistic Analysis*, 20: 1-2.
- 和泉伸一, 2016, 『第2言語習得と母語習得から「言葉の学び」を考える：より良い英語学習と英語教育へのヒント』アルク.
- 中央教育審議, 2021, 『令和の日本型学校教育』の構築を目指して ～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～ (答申) (2022年12月26日取得：  
[https://www.mext.go.jp/content/20210126\\_mxt\\_syoto02-000012321\\_2-4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210126_mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf))
- 胸組虎胤, 2022, 「学習, 「学修, 学嵩と「気づき」の関係を改訂版タクソミーと STEAM 教育の点から考える」『鳴門教育大学研究紀要』 37: 130-143.
- 文部科学省, 2018, 『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語科編』学校図書.
- 山崎朝子, 2005, 「学習者論 -学習者の個人差と第二言語学習-」『東京都市大学観光情報学部研究紀要』 6: 90 - 96.